

いしづち

2022.5

MAY

No.146



公益社団法人 愛媛県建築士会

Ehime Society of Architects & Building Engineers

<http://www.ehime-shikai.com>



道後温泉の源泉について（大正時代前編）
世界建築紀行 インドネシアの世界遺産ポロブドゥールへの旅
委員会活動報告 景観写真コンテスト入選作品が決まりました

- 1 道後温泉の源泉について (大正時代前編) 文化財・まちづくり委員会 委員 花岡 直樹……①
一級建築士 野本 健……①
- 2 世界建築紀行 ユーミンの名曲“スラバヤ通りの妹へ”が導く
インドネシアの世界遺産ボロブドゥールへの旅 西予支部 松山 清……⑦
- 3 委員会活動報告 景観写真コンテスト入選作品が決まりました
文化財・まちづくり委員会景観部会 部会長 曾我部 準……⑬
- 4 けんちくの輪 防災と建築 松山支部 渡部 聡……⑮
振り返って 宇和島支部 豊田 恵介……⑯
- 5 お知らせ 第5回理事会概要報告 事務局……⑰
第6回理事会概要報告 事務局……⑱
令和4年度年会費納入のお願い 事務局……⑲
尾藤淳一さん、石丸真智子さん 国土交通大臣表彰受賞 事務局……⑲
花岡直樹さん 愛媛県政発足記念日知事表彰受賞 事務局……⑲

※尚、表紙及び本誌記事の無断転載を禁じます。



アクリル画

題：「四国カルスト」
 四国カルストは、愛媛県と高知県との県境にあるカルスト大地。標高は約1,400m、東西の幅は約25km。日本3大カルストのひとつで、中でも最も標高が高く、石鎚山などの周辺の山々が一望できる。愛媛県は1964年3月21日に「四国カルスト県立自然公園」として県立自然公園に指定した。

参考資料/ウィキペディアより

表紙作者 上田 勇一 プロフィール

1974 東京生まれ
 1980 小学校から高校まで松山在住
 1990 東日本建築教育研究会製図コンクールにて奨励賞
 1991 愛媛県内高校生建築競技設計にて会長賞 (愛媛県建築士事務所協会主催)
 1993 画家・高橋勉氏に師事。約10年間、古典絵画技法全般を学ぶ
 1996 日本工業大学建築学科 卒業
 1998 画家として活動開始する。東京や埼玉にて毎年個展開催
 2002 日本ファンタジーノベル賞受賞作者「世界の果の庭」(新潮社)の装丁担当
 2003 美術家の登竜門である昭和会にて優秀賞 (東京/日動画廊)
 2010 愛媛県美術館に作品「ドライブフラワー」收藏される
 2015~17 愛媛新聞 冊子アクリート表紙画連載 絵画教室やオリジナルブランド額工房「柵リチエルカ」を設立
 2017 「えひめの塗り絵」を出版
 その他、出版装丁画や受賞多数、全国にて個展中心に活動。
 現在、現代日本美術会 会員/審査員



▲道後温泉（提供：道後温泉事務所）

＜ことわり＞

以下記載内容は、現在の道後温泉本館保存修理工事の状況や収集できた文献から総合的に判断した内容を記載している。そのため、調査状況により新たな知見が得られた場合、記載内容に訂正の必要が生じる可能性はある。

ポンプアップのはじまり

道後温泉は明治時代、神の湯の第1号源泉、養生湯の砂下から湧き出る第2号源泉があった。明治35年（1902）に伊佐庭如矢は町長を勇退した。彼は道後温泉本館の養生湯（後の南棟）、神の湯本館、又新殿・霊の湯棟の建設、道後温泉へ鉄道を引き、道後公園の整備を行うなど、道後湯之町を観光の町として変貌させる大改革を行った。

伊佐庭如矢がこの大改革を行ったのは温泉の湯量の少なさのためである。温泉を活かした事業を行えないため、3階建ての大きな建物や皇室専用の浴室、散策場所に目を向けたのであった。

伊佐庭如矢が町長を辞めた後は、やはり湯量の少なさに目が向けられるようになった。



▲道後温泉第1号源泉（提供：道後温泉事務所）

そのため、道後湯之町による「増湯計画」が始まるのであった。

大正2年（1913）からポンプの吸い上げによる試験を行い、第1号源泉の湧出量が激増することがわかると、元農商務省の河野密技師を招いて本格的に増湯計画を始めた。

しかし、河野技師はポンプ使用による増湯は大変不安で、一時的な増湯を求めるよりは現在の湧出量を永久に持続したほうが良いと主張したが湯之町はポンプ吸い上げによる湧

道後温泉の源泉〔大正時代〕



▲掘削の様子 大正3年頃（提供：道後温泉事務所）

■ はじまり

道後温泉の源泉の歴史は難しい。遥か昔、神の時代からあったと言われ、伊予の湯桁や白鷺の伝説など多くの逸話が残っている。道後温泉は温泉があって、はじめて成り立つものだが、湯量の少なさなどが問題となり、源泉の場所や分湯場は多くが非公開となっているのが現在の状況である。道後温泉の浴室に入ると見ることができる、こんこんと流れ出る源泉かけ流しの様子は道後温泉の湯量が少ないと普通なら考えることはできない。

出量の激増に目を向け、結果ポンプによる吸い上げを開始するのであった。

大正5年(1916)に農商務省の大築洋之助技師を招へいして、ポンプ吸い上げによる調査・研究を依頼した。結果、ポンプによる吸い上げの試験を2・3年継続、新しい井戸は掘削しないこと、温泉場付近の山林は伐採しないことなどの回答を得た。

「道後温泉増補版」はここまでが記載され、一足飛びに昭和2年(1927)に飛ぶ。大正6年～昭和2年までは道後湯之町の変革期であり、町民・議員共々大いに揉めた時期であったため歴史書に記載されなかったものと考えられる。

ポンプアップの反対

大正7年(1918)に「道後温泉増築計画」が発表された。大正13年(1924)に日本国有鉄道(現在のJR)が松山にくることがわかり、その要因により観光客の増大が見込まれたためである。計画の内容は、

- 第1期工事：西湯・砂湯の建設
- 第2期工事：養生湯の改築工事
- 第3期工事：高等湯の建設
- 第4期工事：道後公園内に新湯の建設

この計画は養生湯の源泉をポンプによる吸い上げで増湯を図る計画が前提にあるものであった。第1期工

道後温泉の湯量は少なく、温度の異なる源泉をかけ合わせ、私たちが心地よく感じる42度程度に調整している難しさなどがある。今回、多くの人たちに道後温泉の源泉について少しでも知ってもらいたいと思い筆を取った次第である。

源泉の歴史について比較的、近代の大正時代からまとめようとする。大正時代は道後温泉の源泉にポンプを設置し、増湯を始めた最初の時代であり、非常に重要な時期だと考えたからである。



事は順調に進んだが、第2期工事に入ると問題が生じた。問題の内容は養生湯にポンプを設置することに町民が反対運動を起こしたことだ。それは当然の流れである。大正2年、5年と河野技師、大築技師が調査・研究を行った報告を見れば、これ以上のポンプ設置は源泉に影響を及ぼすことは容易に考えられたからだ。

反対運動は大正11年10月から大正12年の4月までに及び、反対多数でポンプを設置しないことに決まった。当然、その期間は工事を進められず養生湯の改築工事は中断されていた。当時、農商務省地質調査所の井上地質調査局長に道後温泉の源泉の状況、ポンプによる吸い上げによる弊害等を調べてもらっていたが、その報告書を待たずしての結論となった。

今回の保存修理工事で南棟、霊の湯女子浴室の浴槽石の下から養生湯の源泉跡が見つかった。その内容については花岡氏に執筆をお願いした。

1

神の湯の源泉について

明治期の道後温泉本館には、「道後温泉増補版」(昭和57年、松山市刊)やその他諸資料を総合して、

1. 第一源泉：神の湯の男子浴室の下から湧出
2. 第二源泉：養生湯の槽底から湧出

の2か所の源泉があり、共に自噴していた。以下1を「神の湯源泉」、2を「養生湯源泉」と呼ぶ。このうち神の湯源泉については、平成10年の「神の湯浴室改修工事」で、男子東浴室の洗い場床石を剥ぎ取ったときに発見され、当時松山市文化財専門委員を務めていた故河合勤氏により調査が行われている。

2

養生湯の建築、改築の経緯と湯釜

旧養生湯(現南棟)は、明治25年(1892)に建てられた旧建物(写真①)を大正13年(1924)に改築したものである(写真②)。どちらも浴槽中央に湯釜を据え、その位置で東西に間仕切り、東を男子浴室、西を女子浴室として使用されていた。写真③は、壁が板壁でできていることから、大正13年改築前の明治25年建築のものであることがわかる。また、写真④は大正13年改築後のもので、壁にはタイルが貼られている。その後昭和29年(1954)に、建築から30年の使用で木造の浴室の腐朽が進み、鉄筋コンクリート造にて改築された。これより、この浴室を神の湯女子浴室とし、神の湯本館の昭和10年に改築された2つの浴室(これまでは男・女)を、共に男子浴室とした。ここで「養生湯」の呼び名の浴室がなくなった。写真③、④に見られる、明治25年に作られ、



▲写真① 明治25年改築の養生湯西面



▲写真② 大正13年改築の養生湯西面(右)と玄関唐破風棟(昭和10年以降)



◀写真③ 養生湯女子浴室(大正13年以前)



◀写真④ 養生湯男子浴室(昭和29年以前)



▲写真⑤ 放生園に移設され足湯の湯口として使用されている旧養生湯の湯釜

昭和29年まで使われていた湯釜は、道後温泉駅前の放生園に移され、当初は池の放水口として使われ、平成4年以降は「足湯」の湯口として使用されている（写真⑥）。横方向から詳細に観察すると、両方向に湯口があり、中央に間仕切りの痕跡があることが確認できる（写真⑥）。この改築時に新しく作られた湯釜は、浴槽中央に据えられ四方に湯口があり、現在も使用されている（写真⑦）。



◀写真⑥ 同上詳細
湯口が両方あり
側面に間仕切跡が
確認できる



写真⑦▶
現在の湯釜
浴槽の中央に据えられ
四方に湯口がある

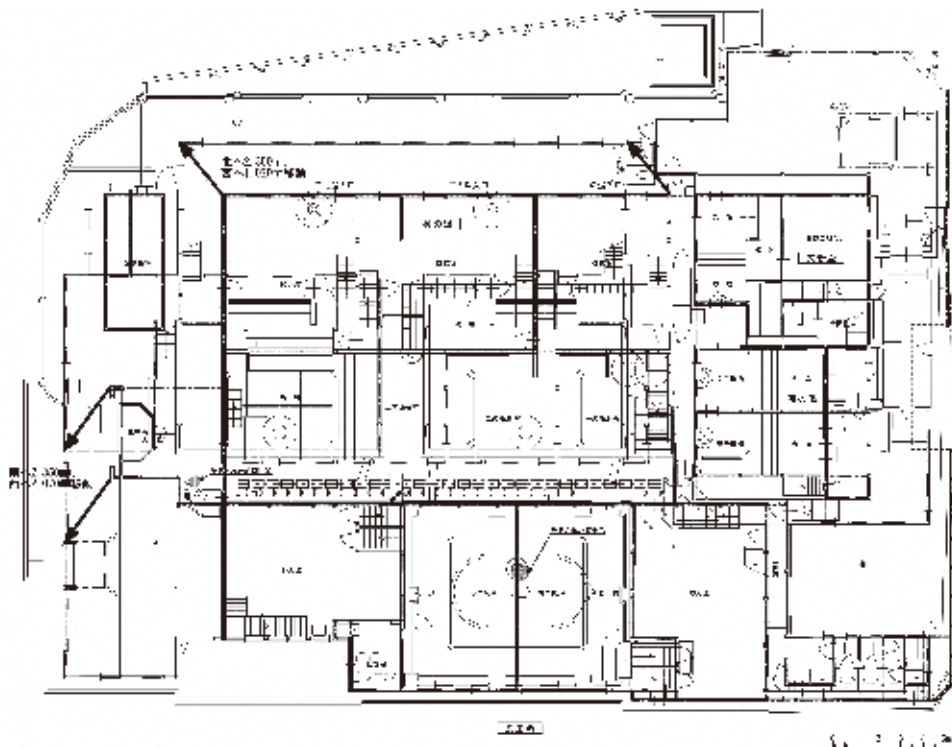
3

養生湯源泉跡 発見のいきさつ

平成31年1月から行われている、「重要文化財道後温泉本館神の湯本館ほか3棟保存修理その他工事」で、浴槽中央の湯釜への給湯管の更新が予定されていた。このために令和2年6月に浴槽の底石の取り外したところ、直径約980mmの2分割された円形の石板が見つかった（写真⑧）。



▲写真⑧ 発見された蓋とみられる円形で二分割の石板



▲図① 新旧比較 1階平面図

現在の平面図に、大正13年の養生湯の設計図、その他古図面を重ね合わせて作成した平面図（図①）を見ると、この位置は養生湯の湯釜が据えられていた場所にほぼ一致することが確認でき、養生湯源泉跡であることが予想された。蓋の板石を丁寧に取り外したところ、直径730mm、深さ約1.5mの円筒形の穴が見つかった（写真⑨）。明治25年建築当初から、大正13年の改築後も使われていた源泉の跡で、昭和29年の改築時にその役目を終えたが、取り壊さずに形を残すために蓋をして保存されたものであることがうかがえた。



▲写真⑨ 発見された養生湯源泉跡

4 詳細調査及び図面作成

6月24日に、内部の様子と寸法を記録する詳細調査を行い、平面図、各層ごとの切断図、円筒部展開図、断面図を作成した。（図②・③、写真⑩～⑬）。調査結果をまとめると以下のとおりである。

- 浴槽底石より330mmの高さでコンクリートが均され、平均厚さ120mm、直径980mm、2分割された円形の御影石の蓋石が載せられている。
- 天端から600mmの間は、現場打設のコンクリートとなっている。巾約36mmの細板を円形に組み立てた型枠跡が見られる。
- コンクリートより下は、円筒形に縦り抜かれた御影石が2段に積まれている。高さは上段が650mm、下段が330mmである。
- 上記のコンクリート及び御影石の円筒の外周については、今回の工事で解体を行っていないため、厚み、形状などの詳細は不明である。



▲写真⑩ 源泉跡調査1 真上より見る

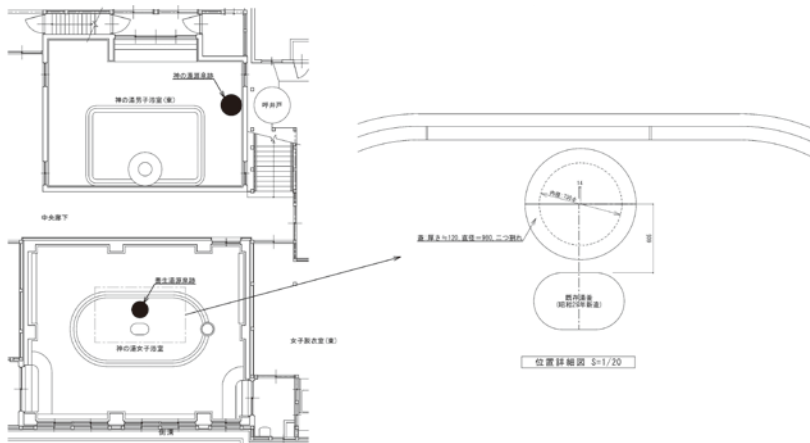
- 円筒形の御影石の下には、高さ約220mm、巾150mm（確認できた最大値）の木材が六角形に組み立てられ、接合部は井桁状になっている。材種は不明。
- この木材と上部の石の段差部分のコーナーに詰められていた、黄土色の漆喰が一部残されていた。
- この木組みより下は、今回解体、掘削を行っていないため不明である。
- これらの円筒形の御影石、六角形の木組みの内側は細砂で満たされていた。

□円筒形のコンクリートの上端（浴槽底石より330mm下がり）より、

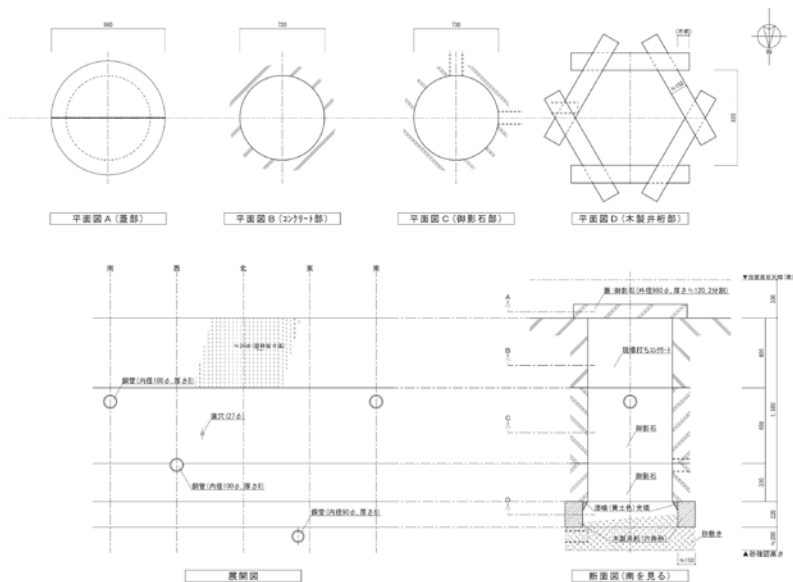
- ① - 720mm、内径100φ、南向き
- ② - 1265mm、内径100φ、西向き
- ③ - 1880mm、内径90φ、東向きの鋼管（肉厚は何れも約8mm）による外部への配管が確認できる。



写真① 源泉跡調査 2 外部への配管(上)。
 写真② 源泉跡調査 3 外部への配管(中)。
 写真③ 源泉跡調査 4 外部への配管(下)。
 写真④ 源泉跡調査 5 底の六角形に組まれた木材。
 写真⑤ 源泉跡調査 6 コーナーは井桁に組まれている。
 写真⑥ 源泉跡調査 7 木材と石の間に詰められた漆喰。



▲ 図② 旧養生湯源泉跡調査図 1 S=1 : 100.1 : 20



▲ 図③ 旧養生湯源泉跡調査図 2 S=1 : 20



ユーミンの名曲“スラバヤ通りの妹へ”が導く

インドネシアの世界遺産 ボロブドゥールへの旅

西予支部 松山 清



▲ボロブドゥールのストゥーパと釈迦牟尼像

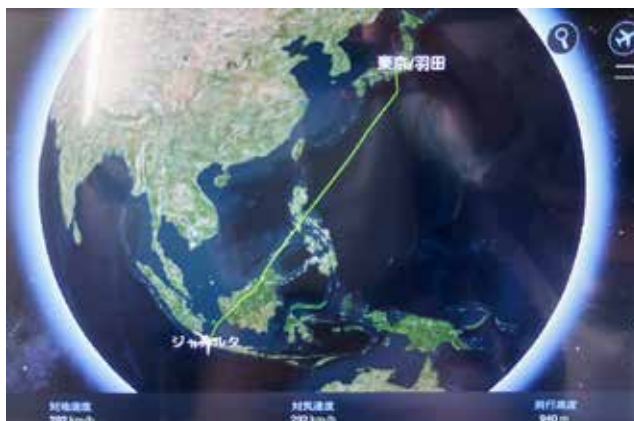
1 南アジアの、遠くて近いインドネシア

1981年リリースされたユーミンのアルバム「水の中のアジアへ」は今でも色褪せることなく私のライブラリーで、中でも“スラバヤ通りの妹へ”が一番のお気に入り。叙景的なアジアの旅の思い出を聴くたびに“スラバヤ通り”は何処だろうとずっと気になっていたのだが、それが首都ジャカルタの通りだと知って、いつかその通りを訪ねてみたいと思っていた。

インドネシアは西からスマトラ島・ジャワ島・バリ島と続く島国で、人口は2億7千万人（世界第4位）の親日の国。本州の半分程のジャワ島西部に首都ジャカルタはあるが、中央部のジョグジャカルタがかつての政治・文化の中心地で、ボロブドゥール遺跡もそこにある。日本で言うと、京都のような所だ。

2018年の初夏、カンボジアのアンコール・ワットを訪ねた際に世界仏教三大遺跡の一つにインドネシアのボロブドゥール寺院があることを知り、ビートたけしの缶コーヒーのCMに登場した、たくさんの不思議な小さなドームが建ち並ぶ遺跡を訪ねることにした。

2 羽田からジャカルタへ



▲ジャカルタへの飛行ルート

ジャカルタへは羽田からANAが直行便を開設していて、人気路線ではないが市内中心部のホテル込みでビジネスクラスで10万円台とお手頃で、この頃は今振り返って見ると海外への旅が手軽に行ける時代だった。

2018年12月7日朝5時起床。松山空港へは6時半に到着したが、羽田乗り継ぎの搭乗手続きにいつものことながら時間を要する。出発ラウンジでは饅頭とコーヒーを口にするのが精一杯で、すぐに朝一番の羽田行きに乗り込んだ。機内ではジャカルタに着いてからホテルに行くまでの手順など確認、空港からは安心なブルーバードタクシーを使うことにした。

羽田10:20発ジャカルタ行きに搭乗。国内線到着が遅れ、wifiルーターを申し込んでいたので出発に間に合うのかとハラハラしたが、16:15にはジャカルタのスカルノハタ空港に降り立った。ホテルまでは白タクには注意していたにも拘わらず、ブルーバードタクシー乗り場看板すぐ手前で案内された車が白タクで、高い料金を取られた。整理券発行ボタ



▲早朝スカルノハッタ空港からジョグジャカルタへ
 ンを押さなければならなかったのだ。多少の失敗は
 あるがその度に余計な授業料が必要となる。

翌早朝4時の飛行機で、まだ真っ暗なスカルノ・
 ハッタ空港からジョグジャカルタへ向かった。ホテル
 でブルーバードタクシーを予約してもらって移動。
 これなら間違いない。そんな早い時間でも空港は混

3 古都ジョグジャカルタの世界遺産巡り

3.1 ヒンドゥー教と仏教が交錯するプランバナン



▲プランバナン正面入口

雑していて、機内では軽食が出された。

インドネシアでは宗教を信仰することが国民の義務で、ヒンドゥー教、イスラム教、仏教、キリスト教のどれか一つを信仰しなければならない。現在はイスラム教が9割近くに上るが、9世紀頃はヒンドゥー教国マタラム朝に支配されていたため、およそ5km四方にわたる壮大な寺院プランバナンが創建された。今では史跡公園となっていて、その中心がシヴァ神殿のあるロロ・ジョングラン寺院で、多くの巡礼者や修学旅行の生徒たちの姿が見られた。



▲ロロ・ジョングラン寺院



▲回廊を飾る神々のレリーフ

▲象頭のガネーシャ像



◀バルコニーに並ぶドーム

ロロ・ジョングラン寺院はプランバナンを中心にあり、炎が燃えさかるような一番高い主塔シヴァ神殿は47mあって聖なる山を表している。神殿の回廊には古代インドから伝わる物語のレリーフや小さなドームのような装飾がなされていた。

神殿の中にある側室には、シヴァ神などヒンドゥー教の神々が祀られていて、象の顔をしたシヴァ神の息子ガネーシャが印象的だった。シヴァ神が誤って自分の息子の首を切り落とし、替わりに象の首を胴体につけたらしい。学問と商売の神様として、今では厚い信仰を集めていた。

神殿から出てきたところでちょうど遺跡を一緒に見学していた修学旅行の女子中学生グループが声を掛けて来た。ジャワ島東部の町から一晩バスで走り続けてプランバナンにやって来たらしく、みんなイスラム教徒の白いヒジャブを被っていた。その中の一人が写真を一緒に撮って欲しい、と話す。何でも、生まれて初めて見た外国人が私だというのだ。その少女たちの瞳は澄んでいて美しく、純粋な輝きだった。少しの英語だけが彼女たちとの架け橋だったが、お互い一生懸命色々とお話をし、そのことがインドネシアの一番の思い出となった。日本から来たこと

を歓迎してくれた彼女たちの眼差しに感謝、インドネシアとの友情みたいなものを感じた。

ロロ・ジョングラン寺院周辺には1584年の火山大噴火によって半壊した数多くの小祠堂が転がっており、修復を待っていた。

プランバナンはヒンドゥー教寺院だが周辺には仏教寺院も多くあって、その作りや形式は混ざり合っているようだった。プランバナンのことは、今回の旅を計画するまで知らなかったが、仏教にせよヒンドゥー教にせよ、ましてやイスラム教にしてもアジアを南下して、島々を伝わってここで果実を実らせたのだ。



▲ジャワの中学生との記念写真



◀修復を待つ壊れた小祠堂



▲主塔のシヴァ神殿

3.2 密林で眠っていたボロブドゥール寺院

ボロブドゥール遺跡はジョグジャカルタから42km北の椰子の樹海が広がるケドゥ盆地にあり、8～9世紀頃シャイレンドラ王朝によって約50年の歳月



▲ジャングルから続く正面参道を飾る神々のレリーフ



▲樹海の中のボロブドール



▲正面アプローチ

◀シンメトリーの平面

を掛け建立されたが、その後王朝は崩壊しジャングルの中で火山灰に埋もれて千年の眠りにつき、人々に忘れ去られていた。それを1814年イギリス人のラッフルズが発見し、その後ユネスコ主導で修復工事がされて1991年世界文化遺産に登録された。

遺跡の見学前にジャングルの丘にある宮殿のようなレストランでランチを食べた。辛いエビチリのように、汗をかきながら食べたが、そこからは遠くのジャングルの中に、ボロブドゥール遺跡が小さく見えた。

ボロブドゥール遺跡は平面がシンメトリーな四角形



▲ボロブドール正面

▲円壇の大ストゥーパ



▲軍艦のように見える寺院全景（正面アプローチ）で、中央部の円壇に円形の大ストゥーパがあってそれを取り囲むように釣り鐘型のストゥーパ72基が置かれている。さらにその外周には432体の仏像が配置されていて保存状態も良く、他では見たことがない世界最大規模の仏教遺跡だった。土の丘の上に石を積み重ねた構造で、内部空間はない。平面図は幾何学模様になっていて、第一回廊から第四回廊の壁には、仏陀が悟りを開くまでの生涯がジャワ様式のレリーフで描かれていた。それは精緻な壁画が刻まれた回廊で、1万人が登場する総延長5kmに及ぶレリーフの森だった。

ストゥーパの中には仏像が安置されていて、切り窓から様子を覗き込むことができるが、中央部の大ストゥーパには窓がない。その他、首が折られている仏像もあった。それらがたくさんあって、整然と並んでいる。寺院を少し離れてみると軍艦のようにも見えた。

当時のシャイレンドラ王朝は、ボロブドールを仏教の大本山の聖地にしたかったのではと私は思った。そして、仏教を中心に国を治めていくはずだったが、王朝が崩壊したという歴史を歩んだのだろう。王朝のお陰で大乘仏教は母国インドを凌駕するほどの高度な芸術文化を花開かせた。そして、人知の底知れなさと仏教文化の当時の成熟・発展を今の時代に伝えている。



3.3 ムンドゥッ寺院と王宮クラトン

ポロブドールの次にムンドゥッ寺院を訪ねた。内部の石仏三尊像は「世界で一番美しい仏像のひとつ」と言われている。寺院は石積み造りで規模も大きくないが境内の巨大ガジュマロは見事で、小さな寺院ながらジャワの風土を感じた。仏塔を見た帰り道に、バケツをひっくり返したような強烈なスコールの洗礼を受け、熱帯雨林気候の暮らしの大変さを知ることとなった。



▲寺院外観



▲内部中央の如来像



▲境内のガジュマロの巨木

その後、ジャワ建築の粋を集めて1756年に造られたクラトンを訪ねた。ここでは毎日伝統芸能が上演されており、人形劇の影絵と音楽演奏を観賞。謁見の間は龍と紋章の手摺り装飾がジャワの王朝らしさを表現していた。ジョグジャカルタの大通りではたくさんのバイクにまみれて馬車も走っていた。



▲人形劇の影絵シアター



▲王宮謁見の間

4 首都ジャカルタを散策

ホテルはジャカルタ市内中心部にあったが、朝早くから何かしら頭の中を音楽がグルグル駆け回るような気がして目が覚めた。窓から見下ろすと大音量の音楽で大きな人形が通りを歩いていて、行列もできている。そんな慣習があるのかと思ったのだが、実はオンデルオンデルという約2.5mのデッカくてキモかわいい人形だった。派手な民族衣装を身につけた張り子で、頭には色取り取りのケンパンケラペと呼ばれる髪飾りを被っているのが特徴。男性と女性がペアになって、楽器を演奏する人と一緒に街の中を歩くというジャカルタの名物だった。



▲張り子のオンデルオンデル

▼国立博物館中庭



▲ジャワ原人

ジャワ島ではジャワ原人が発見されており、国立博物館では人類の進化についての展示が充実。原人の頭蓋骨はレプリカだったが、中庭にはヒンドゥー教時代の石像が並べられていた。また、コモド・インドネシア爬虫類博物館やタマン・ミニ・インドネシア・インダーという多様な民族文化が展示された公園、ジャカルタ中心部のシボルの独立記念塔モナスが立つムルディカ広場へも行ってみた。多くの観光客が集まっており、インドネシアが日本よりも活気のある国だと肌で感じた。

ジャカルタには東南アジア最大規模の巨大モスクがあり、大空間の礼拝堂では祈りを捧げる信者が次々に訪れていて、礼拝の時は人で埋め尽くされる様子が目に浮かぶ。



▲モスクの礼拝堂

5 ジャカルタのスラバヤ通りと波止場

是非とも歩いてみたかった“スラバヤ通り”は、ランプや楽器など何でもある骨董品街で、“土埃・馬車が行く”という雰囲気とは少し違っていたが、この通りを訪れる日本人の観光客は意外と多いらしい。何を感じて帰っていくのだろうか。

ジャカルタ北部、海に近いコタ地区にはコタ駅や博物館などオランダ植民地時代の建物が今でも残っていたが、その周辺は近代的なビルが建ち並んでいる。近代化していく建築の中でオランダ建築様式のコタ駅は、植民地時代の生き証人であることを主張しているかのようで、ことさら目を引いた。



▲スラバヤ通り



◀オランダ様式の
コタ駅



▲船が並ぶ波止場、スندا・クラバ港

その後、波止場へ行って欲しいとガイドさんをお願いすると、たくさんの船が停泊するスندا・クラバ港へと案内された。川の河口のような簡易な港で、かつては交易品を満載した船で賑わっていたそうだが、今では中型の木造船が所狭しと並んでいた。「写真で見た波止場」とは、この風景なんだ！」と追い求めてきたものに出会ったような気分だった。

ユーミンの名曲に思いを馳せる。

写真で見た波止場へ着くころは、
あなたくらい陽に焼けそう…

(松任谷由実 作詞作曲1981年「スラバヤ通りの妹へ」より引用)

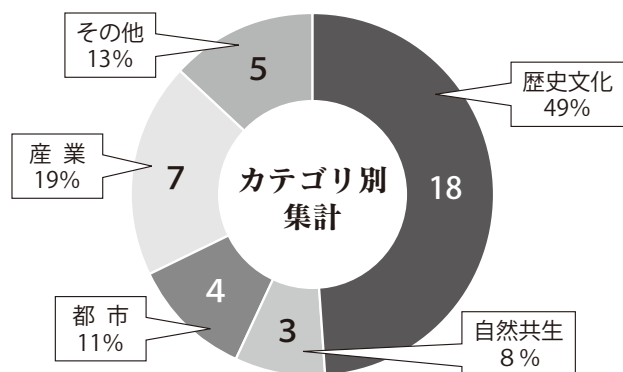
という曲に惹かれてここまでやって来てしまった。もう40年程前の曲が夢を見せてくれたお陰で、インドネシアの歴史と文化に少し触れることができた。

景観写真コンテスト入選作品が 決まりました

文化財・まちづくり委員会景観部会 部会長 曾我部 準

去る3月9日、建築士会館1階会議室にて赤根会長、北村審査委員長をはじめとする参加者9名で第1回景観写真コンテストの審査会を開催し、応募総数37作品の中から8点の入選作品が決まりました。ご応募いただいた方々には厚く御礼申し上げます。

定義することが難しい「景観」ではありますが、人それぞれの思う景観を持ち寄ることでなんらかの方向性が見えてくるのではないかという思いから作品を募集しました。今回寄せられた37の作品を5つのカテゴリに分類したのが次の円グラフです。



カテゴリは応募票の項目として5つ用意したもののなかから応募者の主観で○印をいれてもらったものです。約半数を歴史文化カテゴリの作品が占めています。また他のカテゴリの中であっても歴史文化カテゴリの要素を含む作品も多く見受けられました。どうやら歴史文化的な建築物を景観としてとらえていると言えそうですが、これを結果とするのは早計です。まだ第1回目なので回を重ねることや、建築士からの目線だけではなく一般の方々の目線も参考にして、より確かなものにしていきたいと考えています。

審査は審査員各々の目線で、よいと思われる作品に票を投じるという方法を取りました。1次審査で入選作品の8点、2次審査で入選作品の中から特賞及び入賞作品を5点、3次審査で佳作1点を決めました。審査自体は粛々と進みましたが、もう少しそれぞれの感想を交えながら進めるやり方もあったのではないかと感じました。

今回、次ページに受賞作品8点を掲載し、5月の総会では表彰式を執り行う予定で準備を進めています。また、受賞作品は建築士会館に展示をする方向でこちらも協議



を進めています。

審査委員長をお願いした建築写真家の北村徹さんより講評を頂きましたので、それを記して結びとします。

《講評：北村徹審査委員長》

「景観写真コンテストは建築士の方々の数少ない出展数ではあったが、彼ら特有の目線で捉えられたものが多く実に見ごたえがあった。常日頃、建築士としての目線で社会全体を冷静に、そして誠実に観察されていることもまた十分に窺い知ることができた。これらは彼らのメッセージであり願いでもある。『言葉ではなく写真という媒体を通して考えてみよう』が今回の写真コンテストの最も重要なコンセプトだからである。第二回からは一般応募も考えていると聞いた。プロの建築士の視点もさることながら、一般の方々の新鮮な目線で捉えた独自の景観を是非見たいものである。『歴史ある建築は壊すのは簡単。しかし二度と同じものを作ることはできない』これらの文化的遺産を保存し後世に残すことの大切さを、このコンテストを通じて一人でも多くの人たちに理解してもらいたい。その第一歩として景観写真コンテストが催されたことは、実に嬉しい限りである。」



特賞(審査委員長賞)



『旧東洋紡績赤レンガ倉庫』 杉山博司

入賞(会長賞)



『夜の帳が降りる駅』 伊予支部写真同好会

入賞(副会長賞)



『御神木と拝殿』 高出嘉人

入賞(文化財・まちづくり委員長賞)



『石畳の秋』 和田崇

入賞(副会長賞)



『文化の日の長閑なお堀』 黒河孝俊

佳作



『海南寺と桜』 花岡晶子

入選



『栄光教会』 峰岡義則

入選



『千木』 永井由起

防災と建築

松山支部 渡部 聡

大西さんからバトンを受け継いだ松山支部東地区の渡部です。まずは自己紹介。松工の建築科を1974年（昭和49年）に卒業し、その年から建築業界に入っていきます。ですから48年くらいになります。

【職歴】 最初の勤め先が半官半民の分譲住宅事業会社の建築部でした。当時の市住宅協会、県住宅供給公社並みの融資を受けるこの会社で、当時は戸建住宅が主な事業で、設計から監理まで27年ほど在籍しておりました。芸予地震が起きた2001年（平成13年）に退職。この会社での業務が私の建築の原点となりました。特に木造住宅については事細かに教えていただきました。木構造について意匠、構造、設備など。今では構造はプレカット会社に依頼して梁の掛け方、梁断面など決めてもらうことも多いかもしれません。電気設備や給排水設備図なども1/50で書いており、そのまま施工図になるほどでした。木造住宅は私自身得意分野になっていきました。その後、設計事務所、リフォーム会社、建築会社、木材加工会社（プレカット会社）、不動産会社等、建築の様々な立場で勉強させてもらいました。

【建築士会】 恐らく最初は建築士の資格取得の為、士会主催の講習会を受けるために入会した記憶があります。会員割引を受けるためでした。かなり昔のことになりますが。

士会活動にはほとんど参加することもなく至って意欲のない会員ですが、時々勉強会に参加したことを覚えています。

現在勤めている会社で木造住宅耐震診断登録事務所として業務受託を行うこととなり、技術者派遣制度等で士会事務局に出入りすることとなりました。

私は防災士として居住している地域の自主防災会の事務局を務めていた時期に、動画サイトで建築士の防災講座をいくつか見て建築士会の大西前事務局長さんに相談をしました。そして東地区の渡邊道彦さんを紹介いただきました。

その後防災講座の活動に、準備から当日の手伝い要員として少々ですが参加することになりました。

【防災と建築】 「建築士による防災講座」は2019年（令

和元年）11月に行われ約40名の各組の防災リーダー、一般区民の参加がありました。講座内容は、1. 地震の恐ろしさ 2. 木造住宅の耐震化の重要性 3. 耐震診断・耐震改修には補助金制度がある 4. 家具の転倒防止 5. 災害時のトイレ等、約2時間です。軸組模型の加振実験を行い適正な改修により揺れ方がどれだけ違うか。倒壊までに時間が稼げること。避難する時間ができると建物自体が強くなること。

愛媛県の担当者も協力してくれました。建築士による防災についての講座が解かり易く、参加者には好評でした。そして講座の後に個別に相談コーナーもとり、ある方は早速市役所に相談してみますと言ってくれました。ほとんどの参加者は建物の耐震診断や耐震補強を行うことが重要だと思ってくれたはずでした。

自主防災会は様々な活動を計画します。防災訓練、救命講習受講、防災機器の使用訓練、専門家による防災講座等があり、今まで愛媛大学地質学の専門家、災害救助支援の自衛隊、愛媛大学防災情報研究センターの講師には火災が拡大していく様子をシミュレーション（商店街など割合密集家屋が多い）していただきました。東日本大震災後に現地支援に駆け付けた愛媛大学医学部附属病院の看護師等、様々な専門分野の方に依頼し地域自主防災会の役割、とりわけ防災士、防災リーダー育成の為、自然災害の怖さ、避難所の運営、応急手当の方法など多岐にわたります。

防災訓練は区民全員が参加します。各組の防災リーダーが誘導し避難施設まで避難します。避難途上に著しい劣化のあるブロック塀、車椅子利用者が安全に避難できるかどうか検証します。

これらを調査する目線というのはやはり建築士、防災士ならではの知識と経験が必要不可欠です。災害に強く、住民が安心して住める、隣近所で気兼ねなく話ができる。こういう街づくりを目指すことも、地域に住む建築士の役割ではないかと思っています。次のバトンは同じ東地区の菅野さんです。よろしくお願いします。



▲ 横河原自主防災会



▲ 防災訓練の様子

振り返って

宇和島支部 豊田 恵介

與那原さんよりバトンを受け取りました、宇和島支部長の豊田恵介と申します。今までの人生を振り返って書きたいと思います。

現在宇和島市内で従業員3名、事務員1名（妻：CADで簡単な構造図なら描けます）と、私の計5名で構造設計専門の事務所を営んでおります。子どもは男3人女1人の4人で長男が27歳、末っ子の長女は14歳、中学3年生です。私は1960年2月9日に木造専門の工務店の三男として生まれ現在62歳です。兄2人が工務店の跡を継ぎましたので、当時高校生の私は親から「お前は土木関係とか、建築とは違う方面に進みなさい」と言われたのですが、何故か日本大学工学部建築学科に進学してしまいました。

高校、大学ではハンドボールのゴールキーパーでした。また42歳から極真空手（現・高見空手）を始め20年になるのですが、息子2人が長男6歳、二男3歳のときに近所の極真道場に通り始めると、パンチがどんどん速くなってこのままでは息子に負ける！と思ったのがきっかけです。その後、三男、長女もそれぞれ極真空手を習いましたが、みな中学入学前には辞めてしまい、私ひとり現在も続けております。現在は黒帯二段の有段者です。10年ほど前に参加した大会で、壮年の部で準優勝したこともあります。師範からは3段昇段を打診されましたが、まだまだ修行が足りないのでお断りしております。

構造設計はやりたくて選んだわけではないのですが、嫌いなのに構造系の卒研に入ってしまう、卒業後も「構造設計」に呼ばれたのでしょうか、松山の構造設計事務所で約2年間、その後は東京都豊島区東池袋の構造事務所でも約8年間勤めました。私の構造設計者としての根本は、東京の事務所での業務にあったように思います。「終電があるから家に帰れる」というような日々で、バブル経済を謳歌する暇もお金もなく働き詰めではありましたが、辞めて30年経ちますが、毎年お歳暮を贈るほど、東京の所長には今でも感謝しています。

バブルの崩壊もあり、平成5年3月、33歳で地元宇和島に戻り独立、開業しました。独立した当時は、一生懸命に構造設計をしても図面通りの工事が行われず、構造計算は確認申請を通すための書類だったように思います。当然報酬も低く、いくら働いても生活は楽にはなりません。 「豊田さんは意匠設計ができないから（実際その通りですが）構造設計をしてるんでしょ」と馬鹿に

されることもあり、子どもたちにも「こんなつまらない職業は継ぐな」と言っていました。

構造設計の世界を一変させたのは17年前に起きた「耐震偽装（姉齒）事件」です。これにより確認申請機関ではない、第三者が構造設計を確認することとなり、第1回構造計算適合性判定員試験が行われました。ちょうどこの年は長女が生まれた年でもあります。昔から子どもは自分の食い扶持を持って生まれてくるといわれますが、まさにその通り、私は構造計算適合性判定員試験に一発合格したのです。その際四国での合格者は15人、愛媛県では5人しかいませんでした。長女には感謝しています（生まれてきてくれてありがとう！）。

このおかげで県、市の耐震診断、補強の入札に入ることができ、宇和島周辺の高校の耐震診断および補強をすることができました。また、現在に至るまで、(株)建築構造センターの非常勤構造計算適合性判定員として構造計算書の判定業務をしております。構造設計者としての技術力を高めてくれた仕事はやはり耐震診断、補強業務です。また、適判員として構造計算書を確認することで得られる技術があり、自分自身が構造設計するだけとは違い、倍速以上に技術力が向上したと思っています。

構造設計はだれがやっても同じようなものが出来ると思われがちですが、それは違います。なぜここに？と思われようところに無駄な柱があり、不経済であったりもします。構造設計者の判断によって部材はまるで違います。子どもたちが幼い頃に「構造設計は大変なだけだからやらなくていい、跡を継ぐことは考えなくていい」と言い続けたせいでしょうか、子どもたちは誰も跡を継ぎませんでした。これからどんどん構造設計者が少なくなるでしょうから、なんとか続けていきたいと思えます。目標はまずあと10年！

今回は藤井英樹さんへバトンを繋ぎます。宜しく願い致します。



▲南宇和高校体育館耐震改修



▲空手道場にて